

松 山 大 学 論 集
第 21 卷 第 4 号 抜 刷
2 0 1 0 年 3 月 発 行

マルクス主義総括の暫定的結論と今後の研究課題

千 石 好 郎

マルクス主義総括の暫定的結論と今後の研究課題

千 石 好 郎

は じ め に

私は、松山大学在職中に以下のような4冊の著書を刊行した。

- ① 1987 年 『社会体制論も模索：パラダイム革新への助走』 晃洋書房
- ② 1989 年 『「近代」との対決：社会学的思考の展開』 法律文化社
(2001 年に、増補改訂版を刊行)
- ③ 2007 年 『近代の〈逸脱〉：マルクス主義の総括とパラダイム転換』 法律文化社
- ④ 2009 年 『マルクス主義の解縛：「正統的な科学」を求めて』 ロゴス

社会科学の歴史のなかで、第二期に登場した近代社会学とマルクス主義という二つのパラダイムの関係を研究すること、両者の対決に、私の関心の焦点があったと言える。

そして、当初は、マルクス主義の側を主軸に近代社会学のマルクス主義批判を包摂していくことに関心があったが、次第に逆転して、近代社会学の側からマルクス主義を批判し、超克していくという立場に、移行していったといえる。とりわけ、近年に刊行した③と④の著作がそうである。

そこで、退職記念号に「マルクス主義総括の暫定的結論と今後の研究課題」として一応の区切りをつけることにした。④を刊行した際、ロゴス社の村岡到氏に、2009 年 4 月 29 日に文教市民センターで開催された社会主義理論学会の年次大会で依頼された報告を文章化したものが、「社会主義理論学会会報第 64 号」(2009.7.4)に「マルクス主義の解縛を求めて」として掲載された。本稿

の前篇として、再録することにした。後篇では、今後のマルクス主義研究の課題を浮彫りにさせるために、類似のモチーフを抱いている中川八洋氏の所論を批判的に検討することにした。

前篇 マルクス主義総括の暫定的結論

(1) 私のマルクス主義研究の到達点

近年、私は、『近代の〈逸脱〉』法律文化社（2007）と『マルクス主義の解縛』ロゴス（2009）の2冊の著書を刊行し、積年のマルクス主義研究に一応の決着をつけた。

その骨子を要約すると、以下の通りになる。

- (a) マルクスは、空想的社会主義者である。なぜなら、マルクスは、近代の諸制度のすべてを、廃絶・死滅させようとする。すなわち、分業の廃絶、市場の廃止、国家の死滅、資本・賃労働の止揚、近代家族の廃止、議会制民主主義の無視、宗教の消滅…。人間は、大脳が他の哺乳類に比較して異常に発達しており、言語を発明し、文化を創造し、様々な制度を創造する動物である。人間が創造した諸制度には、それなりの存在理由がある。

そのような諸制度を諸悪の根源として、廃絶し無に帰すことは、不可能である。それゆえ、マルクスは、空想的社会主義者であると断定されざるを得ない。

- (b) 1917年のロシア革命以後、20世紀の「社会主義の実験」が証明したのは、マルクス主義が空想的社会主義であるということである。すなわち、諸制度を廃絶・死滅しようと無理に実行しようとすると、赤色テロル、強制収容所、粛清を伴わなければならない、悲惨な結果が生じたのであった。

(2) マルクス主義の社会科学的后進性

社会科学の方法論から見れば、実証主義と理想主義との双方を統合した立場が、正しい立場とするのが、今日の常識である（→第4期のタルコット・パー

ソンズの〈主意主義的行為理論〉。拙著『近代との対決』法律文化社（2001）参照）。マルクス主義は、ドイツ観念論を裏返した唯物論であるが、これは、実証主義に偏向した理論である。マルクスは、1848年の三月革命敗北後、初期のブランキズムの限界を反省して、資本主義の科学的解明を企図して、経済学の批判的摂取を試みながら、経済学批判の作業を行ったが、丁度、死去した1883年直後に、開花する第3期の社会科学（社会学では、デュルケムやヴェーバー、経済学ではワルラスやメンガー）を摂取することはできなかった。このことが、マルクス主義に様々な難点をもたらした。

(a) マルクス主義の基本概念の曖昧性（多義性）、

マルクス主義の諸実践に多大の不幸な結果をもたらすことになった。例えば、

①「プロレタリアート」概念

初期マルクスでは、「人間の完全な喪失であり、…人間の完全な回復によってだけ自分自身をかちとることのできる領域」とされて、いわば哲学的で抽象的に論じられているが、後期マルクスでは、資本家から搾取される「賃金労働者階級」とされた。階級概念の多義性は、その後もマルクス主義の宿痼となってきた。先進国では、新中間階級論争が繰り返されたし、ソ連では、「富農（クラーク）」とは何かと言えば、ボリシェヴィキの政策に反対する農民を指すようになってしまった。「人民の敵」「帝国主義の手先」など、その恣意性は極点まで高まった。

②「独裁」概念

①ソヴィエト？ ②党？ ③書記長の独裁??

レーニンが党の独裁に、トロツキーはソヴィエトの独裁に、スターリンは書記長の独裁に、傾斜した実践をなそうとしたのでは、なかったであろうか？

③「社会化」概念

「生産手段の社会化」が目標とされたが、その含意は、「国有化」なのか、「共同組合的所有」なのか、極めて曖昧に留まっている。

(b) マルクス未来社会論の空想性

マルクスは、実際には実現することのできないユートピアを、共産主義社

会・未来社会として構想した。そして、それに至るまでは、「プロレタリアート独裁」の必要が、唱えられた。他方、近未来の青写真を描く試みは、非科学的とされ、例えば、コントの試みを「未来の飲食店のための調理法」と貶した。

しかしながら、われわれ人間は、制度を創造し、それを手直しすることの積み重ねでしか、「より良き社会」を構築することは出来ない。近年、「マニフェスト」の提示が、競われるようになったことは、当たりまえのことであり、市民的成熟の兆し＝健全なことなのではなかろうか？

(c) マルクス主義の政治は、とりわけレーニン時代からスターリン時代まで、共産主義実現のためには「目的のためには、手段を選ばない」というのが、実態であった。その結果は、ヴェーバーがルカーチへの手紙で述べているように、民衆の信頼を完全に喪失して、社会主義の信頼回復には「50年」かかるかと述べたが、どうやら回復にはさらに多くの時間がかかりそうである。社会学者たちの奮起が求められている。

(3) ポスト・マルクス主義へ向けて

このように、マルクス主義の政治運動が空想的であることは、現実の運動が壁にぶつかることによって、次第に多くの人々に自覚されるようになってくる。そうしたなかから、「ポスト・マルクス主義」を唱える思想運動が誕生する。

(a) それは、1968年前後からの新しい社会運動の経験を理論化するなかで、登場する。その成果が、Laclau, E. & Mouffe, C. “Hegemony & Socialist Strategy: Towards A Radical Democratic Politics”, The MIT Press, 1982 (山崎カオル／石沢訳, 『ポスト・マルクス主義と政治』大村書店, 1992) であり、私は、拙著『近代の〈逸脱〉』(2007)で紹介した。

(b) しかしながら、ポスト・マルクス主義には先達があり、それは、1930年代のアメリカでスターリン主義系とトロツキズム系との党派闘争を経験したなかから、様々な模索を重ねて誕生したニューヨーク知識人の理論的営為に

求めることができよう。日本では、彼らの試みの全容の解明は、なされていないが、拙著『マルクス主義の解縛』では、ダニエル・ベルを論じている。日本とアメリカの社会主義運動の落差を痛感させられる。

- (c) しかし、ポスト・マルクス主義の端緒は、すでにドイツ社会民主党の修正主義論争のなかにあったのではなかろうか？ 欠陥理論であるマルクス主義は、誕生当初から動揺・崩壊の種を宿していたのである。

(4) 今後の検討課題

今後の課題について、列挙することにした。

- ① これまでのマルクス研究の総括、例えば、宇野理論（マルクスの言説を、経済学の側面から厳密に再構成して、マルクス主義の限界を明らかにした）、アルチュセール学派（マルクスの言説を、歴史理論の側面から厳密に再構成して、マルクス歴史理論の限界を明らかにした）の総括が必要である。
- ② マルクス主義を真に超克する代替理論（オルタナティブ）を模索することの必要性。それがなければ、人は、マルクス主義がどのような悲惨な事態を帰結していても、その呪縛から逃れることはできない。私は、その代替理論（オルタナティブ）として社会学の分化理論（Differentiation Theory）を想定しているが、関心のある方は、拙著を参照されたい。

いずれにせよ、人類は、多大の犠牲を支払って、「社会主義の実験」を経験したのであり、その経験を徹底的に研究して、教訓を導き出す必要がある。昨年来の金融危機の到来で、民衆は苦難の状況に追い込まれているのに反比例して、今、マルクス・インダストリーは好況局面に入っているようである。このような時節であるからこそ、安易なマルクス主義復活に陥ることなく、冷静にマルクス主義の批判的総括が遂行し、真に望ましい社会（それを社会主義と呼ぶかどうかは別として）の模索がなされるべきである。

後篇 マルクス主義研究のこれからの課題： 中川八洋氏の諸説との対質を通して

第1節 マルクス主義総括のさらなる深化を求めて

前篇では、私自身のマルクス主義総括のあらましをまとめた。しかしながら、マルクス主義は、20世紀を大きく揺るがした思想である。そう簡単に総括が完成するようなものではない。まだまだ、不十分な部分、ほとんど手つかずの要素など、やり残した部分が残されている。今後の研究課題は、これまで明らかにしてきたものに何が不十分なのかを明確にすることから浮上してくるのではなからうか？ その際、参考になるのは、そのような作業を遂行して来た先達者の業績である。

先達者といった場合、我々は、マルクス主義者のなかでそのような試みを行っている人々に関心がむく。そのような作業を、私自身、旧著で取り上げてきた（「村岡到社会変革論の到達点」『マルクス主義の解縛』所収）。そのような立場の人々は、ポスト・マルクス主義者として、欧米では一つの思想潮流を形成している（ただし、日本ではほとんど影響力を及ぼすほどにはなっていないが）。とはいえ、この立場の人は、ポストに比重があるか、マルクス主義に力点があるかの相対的な差異はあるが、相変わらず、マルクス主義の尻尾を引きずっている場合が多い。まさに、マルクス主義に呪縛されているわけである。

そこで、私が前著で「マルクス主義の解縛」を提唱したのは、そのような状況を打破するためであった。この課題を遂行していくためには、これまでに蓄積されてきたマルクス批判の業績から学んでいく必要があるのではなからうか？ そのためには、マルクス批判家や保守主義者の部類に入ると目されている論客のマルクス論をも視野に入れて、検討する必要がある。

第2節 中川氏のマルクス主義総括のモチーフ

マルクス主義の磁力圏から離れて、すでに早くからマルクス主義批判の試み

を遂行してきた人々には、一昔前であったら、高田保馬、小泉信三、林健太郎、猪木正道、関嘉彦といった人々の名前が浮かんでくる。これらの人々は、すべて故人である。ここでは、現役でばりばりの人を探してみることにしたい。そこで浮上してきたのが、中川八洋氏の業績である。

中川氏のマルクス主義総括の論点設定は、1996年に刊行された『正統の哲学・異端の思想：「人間」「平等」「民主」の禍毒』（徳間書店）においてなされている。まず、氏のモチーフ生成の経緯から見ていこう。「はじめに」において、次のように述べている。

「本書執筆の動機は、ソヴィエト帝国が崩壊したあの1991年12月25日、テレビの画面からであった。モスクワのクレムリンの塔から鎌と鎚の赤旗が降ろされ、旧ロシア帝国の三色旗がするすると掲揚されていくというその光景であった。この光景を見ながら、自由社会は必ずや、全体主義イデオロギーが破綻しこれをもって永遠に人類と無縁になったと浮簿にも短絡するに違いない。みずからがよって立つ精神的・思想的基盤の方がリアクションとして空洞化し崩落していくことを懸念するのを怠るに違いない、と確信したからであった」¹⁾。ソ連崩壊の時点で、このようなモチーフが萌していたのには、いささか驚かされる。たしかにソ連崩壊は、社会主義の敗北＝資本主義の勝利という単純な図式が横行したことが想起される。この時点で、自由主義の「精神的・思想的基盤」の「空洞化」を懸念していたというのであるから、先見の明があったといえよう。

中川氏は、その上で、マルクス主義（または、マルクス・レーニン主義）の研究課題を三つの分野にわけて提起している。この中川氏による課題設定は、私が試みてきたし、これから取り組もうとする課題に大きく重なっているものであるので、中川氏による課題設定を参考にしながら、それと対質させながら、今後の私の研究課題を明らかにしていくことにしたい。

第3節 第一の分野

中川氏は、第一の分野を「マルクス・レーニン主義に基づく国家の現実がいかなるものであったか、その真実を明らかにすることである」とし、「共産国家（共産主義体制）とは悪魔的な暗黒の社会であるという実情を率直そのままに直視しいわば暴露することであり、要はマルクス・レーニン主義の木に咲く花は猛毒の花であることを率直に指摘することである」²⁾としている。

第一の分野で私が実際になした仕事は、レーニン主義についてある程度、考察してきた。しかし、レーニン以後、スターリンの指導した時期については、まだ踏み込んでいない。とりわけコミンテルンの指導した世界革命の実態、および第二次世界大戦のときのコミンテルンの政治的振舞について、解明する必要があるであろう。

① ソ連邦のインテリジェンス活動の実態の究明

ソ連邦のインテリジェンス活動については、日本では、以前からゾルゲ事件への関心が持続しており、昭和史の論点の一つとなっている。それに関わって、近衛文麿をめぐる多くの謎については、近代史家たちが様々な著書を著わしている。ただ、コミンテルンの活動の全容についてはまだまだ未解明の部分が多い。

中西輝政氏は、次のように回想している。

「私が若いころ、明治生まれでないし大正中期以前に生まれて戦前の日本を比較的よく知っている知識人たちから、『あの戦争は、国際共産主義という大きな魔の手に日本が絡め取られて起きたものだ。連中は日本を倒した後、今度は世界革命に取り組んでいる』と話すのを何度も聞いたことがある。しかし、“国際共産主義”なるものが戦争の原因だ、といわれても雲を掴むような話であり、敗戦の言い訳をしているだけの話ではないか、と思っていた。しかし、その後イギリスに留学して国際政治や諜報の歴史を研究したこともあって、その

意味がわかるようになり、彼らがいていた、『国際共産主義の陰謀』という、一見おどろおどろしい表現だが、その見方が、他のいかなる戦争原因論よりも正鵠を射ていたことに気づくようになった」³⁾

たしかにこのエピソードの前半の「国際共産主義の陰謀」説は、三田村武夫著『大東亜戦争とスターリンの謀略』自由社（1987）などによって一応、論証されている。ちなみにこの本は、戦後直後 GHQ によって焚書とされていたものである。GHQ の焚書については、最近、西尾幹二『GHQ 焚書図書開封：米占領軍に消された戦前の日本』徳間書店（2008）によって、その実態が解明されつつある。

第二次世界大戦の主犯説＝コミンテルンについては、近年、Chang, Jung & Jon Halliday “Mao: The Unknown Story”, Globalflair (2005) が土屋京子訳によって『マオ：誰も知らなかった毛沢東』講談社（2005）として翻訳されて、日本でも次第に知られるようになった。インテリジェンス一般への関心も、佐藤優氏の一連の著作で高まっている。この領域の研究は、私にとっては、まだ開始したばかりであるが、さらに深めていくことにしたい。

② フランス革命とロシア革命との関連

中川氏は、「ソ連体制をうんだのはロシア革命（1917 年）であるが、このロシア革命とはそれより 128 年前のフランス革命（1789 年）に二番煎じともいうべき『第二フランス革命』なのだから、ロシア革命批判はフランス革命批判を抜きにして完全なものとは決してなりえない」と主張し、「マルクスとエンゲルスはもちろんのことレーニンやトロツキーすら、フランス革命がうんだ嫡流の子孫であって、裏を返せばフランス革命なしにはマルクスの社会主義（共産主義）の教義もレーニンの異常な独裁体制も人類の歴史に存在することはなかったのである」としている⁴⁾

日本では、フランス革命と明治維新とを比較する研究書は、たしかに存在していたが、ロシア革命とフランス革命との継承性を主張し、ロシア革命＝「第

二フランス革命」と断定しているのは、私の狭い知見では、中川氏が初めてではなかろうか？ もちろん、私も『マルクス主義の解縛』（2009年1月）第1章「レーニン諸実践の再検証」において、レーニンたちボリシェヴィキの指導者たちが、フランス革命を深く研究し、とりわけフランス革命においてロベスピエールらが失敗した原因を彼らの赤色テロルの不徹底性に求めていることを指摘していた。しかしながら、中川氏の知的試みは、はるかに徹底的で、フランス革命とロシア革命との対比を、以下のように集約している⁵⁾。

	フランス革命（1789年ー）	ロシア革命（1917年ー）
教祖	ルソーほか	マルクスほか
『聖書』	『社会契約論』『エミール』ほか	『共産党宣言』『資本論』ほか
実行者	ロベスピエール（ジャコバン党）	レーニン（ソ連共産党）
革命の宗教的使命	a. 革命的人間への改造 b. 伝統の破壊による社会改造（『社会契約の国家』の創造） c. 脱キリスト教の新宗教樹立と全人類への布教	a. 革命的人間への改造 b. 階級破壊による社会主義体制への改造 c. 共産主義（新しい宗教）信仰の全人類への布教とこれによる全人類の救済
革命権力の構造	全体主義（個人の自由の全面否定）	全体主義（個人の自由の全面否定）
大衆扇動と革命権力の正当化の論理	「神聖な（善の）人民」と「悪の王制」の善悪二元論	「救世主のプロレタリアート」と「悪魔のブルジョワジー」の善悪二元
支配（統治）の具体的方法	テロリズム（大量・無差別的殺戮による恐怖政治）	テロリズム（大量・無差別的殺戮による恐怖政治）

このような中川説の当否を検討することは、今後の課題となるであろう。

第4節 第二の分野

中川氏は、第二の分野を「マルクス・レーニン主義の教義（ドグマ）」とこの教義のもたらす現実との関係に関する研究であって、これを信奉する国家が必

ず人類（人間）をしてあれほどの暗黒の現実にならず導いていく、そのメカニズムを明らかにすること」としている。そして「共産国家のその非人間的な惨たる実情がマルクス・レーニン主義の教義に一致した結果であることを証明するもので、マルクス・レーニン主義の木からは猛毒の花しか咲かないことを理論的に証明する」、すなわち「ソ連体制は『間違った社会主義（共産主義）』ではなく、社会主義（共産主義）とはソ連や北朝鮮のように『狂った社会』にしかなりえないことを証明するものである」としている⁶⁾。

そしてその先駆的業績として、ソルジェニチンの『収容所列島』やジョージ・オーウェルの『1984年』を挙げているが、この領域の課題としては、マルクス主義が科学的社会主義を標榜し、その理論的根拠づけとして、『資本論』を提示している。いわばマルクス主義のバイブルともいえるものである。従って、マルクス主義の根拠を根本から揺るがすためには、『資本論』の検討が必要ではなからうか？

当面、私が取り組まなければならないと考えているのは、オーストリア学派の理論的成果の再検討である。オーストリア学派の研究者である八木紀一郎氏は、『ウィーンの経済思想：メンガー兄弟から20世紀へ』ミネルヴァ書房(2004)において、次のように述べている。すなわち、

「ベームは、メンガーが引退したあとのウィーン大学でヴィーザーとともに教授として講義を担当した。学界に復帰してベームが最初に開いた演習には、ベームのマルクス批判に反論しようとするオットー・バウアーやルドルフ・ヒルファールディングなどのマルクス主義の学生がのりこんできて、華々しい論争が展開されたと言われる。このセミナーで学んだのが、ルードヴィッヒ・ミーゼスとヨゼフ・シュンペーターである」⁷⁾

そして、その論争のテーマについて「そこでの直接の論争点は、マルクス主義者の信奉する労働価値説とオーストリア学派の効用価値説の優劣であったが、それはもちろん、資本主義経済の評価、自由主義と社会主義の選択という問題を含んでいた。これらの問題は、このゼミナールの参加者であったシュン

ペーターとミーゼスが彼らの生涯を通じた研究によって答えようとした問題であった」⁸⁾

私の研究課題も「自由主義と社会主義の選択という問題」であるので、どうしてもアースオトリア学派の検討を回避するわけにはいかない。その手始めとして、以下の文献の解説を試みようと考えている。

- ① Boehm-Bawerk, K. “Zum Abschluss des Marxschen Systems”, 1896
木本幸造訳『マルクス体系の終結』未来社, 1969
- ② David Ramsay Steel, “From Marx to Mises: Post-Capitalist Society & the Challenge of Economic Calculation”, Open Court, 1992

第5節 第三の分野

マルクス主義超克のために中川氏が設定している研究分野のうち、第三の分野は、「マルクス・レーニン主義の教義（ドグマ）がどのようにして形成されてきたかを思想史的に明らかにすること」である。すなわち、第三の分野は、「この猛毒の花を咲かせるマルクス・レーニン主義の教義の木がどのような根から成長したのか、木の根の部分をはっきりとさせるもの」である⁹⁾。そのなかでも、特に重視されているものが、「ルソー理論とマルクス理論との関連の究明」である。

私も、ルソーとマルクスの関係については、折に触れて、いつか本格的に調べてみたいと考えてきた。例えば、Galvano della Volpe, “Rousseau et Marx”, Editori Riuniti, 1964（竹内良知訳『ルソーとマルクス』合同出版, 1968）を入手すれば、ルソーとマルクスについて知らなければならないと思ったし、田中吉六『ルソーからマルクスへ』農産漁村文化協会（1980）や長崎浩「ルソー・政治思想の故郷」（『超国家主義の政治倫理』1977）などに接すれば本格的に究明しなければならないと考えてきた。しかしながら、中川氏の所説に接して、このルソーとマルクスの関係の究明は、焦眉の課題となってきたといってよい。

しかしながら、中川氏の場合、ルソーとマルクスの理論的継承性の深さは、

極めて大きい。フランス革命とロシア革命の関連性・継承性については、(a)「第一の分野」で紹介したが、それを敷衍して、中川氏は、次のように主張する。すなわち、

「無差別殺戮というテロリズムをもって『徳性』の発露であり『正義』の強調だと見るジャコバン党の独裁は、20世紀に誕生した『マルクス・レーニン主義』の原型であった。／この教義（ジャコバン主義）とは、主として18世紀の『啓蒙思想家』の思想を起源としている。すなわち、ルソーを代表としてヴォルテール、ダランベール、ディドロたちの哲学こそフランス革命の暴力／破壊／独裁の源泉であった。この意味で、ジャコバン主義は、ジャコバン党のリーダーのロベスピエールとこのロベスピエールが熱烈に崇拝したルソーとを組み合わせ、『ルソー・ロベスピエール主義』と呼ぶ方がはるかにわかり易い」。要するに、「ロベスピエールはまた、『ルソーの血塗られた手』とも呼ばれた教条的な『ルソー教徒』であった」とされる¹⁰⁾

中川氏は、この点を、Robinson, Dave & Zarate, “Introducing Rousseau”, Icon Books, 2001；渡部昇一監訳『絵解き・ルソーの哲学：社会を毒する呪詛の思想』PHP研究所（2002）における、「解説：“ルソー神話”が支配する日本」において以下のようにさらに敷衍している。中川氏によれば、「日本ではルソーをことさらに偉大な哲学者と崇めながら、それでいてルソー思想を正しく考察したものは皆無に等しい」¹¹⁾

① ルソーの定義する「自然」

「ルソーの『自然』は、ルソーがユートピアだと妄想する、いわゆる思弁上の人工社会（国家）のことである。善悪がない、法律がない、私有がない、家族がない、というディストピア（逆ユートピア）の社会（国家）をルソーは『自然』と呼んだのである。ルソーの『人間不平等起原論』（1755年）とは、この『自然』への第一歩としての文明社会を破壊するための暴力革命を先導した書であった」¹²⁾

「マルクスは、このルソーの『自然』に経済の部分を加えて、そっくりその

まま『共産主義社会』と名付けたのである。〈共産主義社会〉とは『自然』の別名のディストピアと言いうる」¹³⁾

したがって、中川氏は、「マルクスの書いた超ロング・セラーである、1848年の『共産党宣言』とは、『人間不平等起原論』の事実上の盗作であり、“ルソー教宣言”であった」¹⁴⁾と断定する。

② ルソーの「人民主権」概念

「ルソーは、その著『社会契約論』(1762年)で人民を『主権者』だと明言したが、『主権者である人民』は法律を策定してはならないし、審議してもならない、とも論じている。『一般意思』がわからない、『特殊意思』しか持ち得ない、人民は立法から排除されるべきだ、とルソーはこの書で定めている。ルソーの『主権ある人民』は、“主権”が完全に剥奪されている」¹⁵⁾

③ ルソーの「社会契約」概念

「ルソーの言う『社会契約』は、“入信”を意味しており、『契約社会』の国家とは、宗教的熱情を持った“信者”(ルソーはこれを『市民』と言う)からなる宗教団体と化した国家のことである。だから、ルソーの『契約社会』は、この世の絶対者『立法者』が君臨して『主権者』の『人民(=信者)』をすべて奴隸的に支配する国家のことである」¹⁶⁾

④ 『エミール』は、人間改造の教典である

「権力者(独裁者)によって人間を改造すべきだと考えた最初は、プラトンの『国家論』を除けば、近代ではルソーがその嚆矢である。『エミール』とは、ルソーがこの人間改造を唱えてその「理論」を案出した著作であって、教育の書ではない。このことは、『エミール』が既成宗教(キリスト教)の棄教や理神教への改宗を子供にススめることでも明白だろう」(→第四編「サヴォアの助任司祭の信仰告白」)¹⁷⁾

このように解釈する中川氏は、「『エミール』の主眼は人間改造である。人間をして究極の非人間に改造することである。実際に、『エミール』は、20世紀にレーニン／スターリン／金日成／ボル・ポトなどの、ディストピアというべ

き共産主義の国々で実践された、人間改造のその聖典となった」¹⁸⁾と断定する。

まさしく、日本で流布しているルソー像を完全に覆す驚天動地の説である。中川説が正しいかどうか、今後、検討していかねばならないだろう。

第6節 中川説への疑問

中川氏は、『正統の哲学・異端の思想：「人間」「平等」「民主」の禍毒』の巻末で、「文献リスト：『悪書』の過剰と『良書』の欠乏」について論じている。そのなかで次のような記述が見られる。

「同様な文献リストには、わが国で広く活用されているニスベット著の『保守主義：夢と現実』（昭和堂）の巻末にある「文献ノート」があるが、ニスベットが保守主義者の選別については、かなり粗雑であるのは否めない。例えば、あろうことか、サン・シモンやコントあるいはヘーゲルという、保守主義の対極にある反保守主義者の巨頭たちまで保守主義としている」¹⁹⁾

このような立論は、果たして正しいであろうか？

中川氏のコントについての記述を見てみよう。

「コントも1848年に『人類教』を発案し翌年教会を設立した。／なお、みずから『大司祭』と妄想するコントの『神』となった『人類』とは、一般通念上の『人類』ではない。ある基準で選別された人間をもって『人類』としたのであって、ルソーの「人民」の穏健版であった」²⁰⁾

コントが「人類教」を設立したのは、中川氏がフランス革命の負の側面（恐怖政治やテロリズムの横行）に対して嫌悪しているように、同じく秩序をもたらすためであった。ただし、コントと中川氏との差異は、中川氏が秩序のみを欲しているのに対して、コントは、秩序と進歩との調和を求めたところにあるのではなかろうか？

さらに、中川氏は、社会学に対して極めて強い偏見を抱いているようである。たとえば、次のような発言が見られる。

「近代の学問（社会学）の誤りは、文明の大規模な人間社会を、ブルジョワ

ジーとプロレタリアートとの経済格差による階級でもって分類したりすることである。…社会学は、根本において、狂った学問である」²¹⁾

これもまた、社会学に対する無理解から来ているのではなかろうか？ このような社会学に対する無理解は、社会科学の歴史について単純な裁断となって現われている。

「18世紀のコンドルセ以来のその後継者たちはサン・シモン／コント／ヘーゲル／マルクスと続き、進歩史観（「進歩」の宗教）が19世紀に完成した」²²⁾

私は、『近代の〈逸脱〉』（2007）において、サン・シモンを源流として、コントとマルクスとの二種類の第2期の社会科学が誕生したとして、コントとマルクスの差異を解明しようと試みたが、中川氏は、あまりにも両者を一色に塗りつぶしてしまっているのではなかろうか？

本項冒頭での中川氏のニスベット説否定（サン・シモンやコントあるいはヘーゲルという、保守主義の対極にある反保守主義者の巨頭説）は、やはり通説の通りニスベットの方が正しいのではなかろうか？

お わ り に

以上、マルクス主義を総括するという点で、中川八洋氏と私とは、共通のモチーフがあったので、対質させることを試みてきた。中川氏の所説は、それ以外にも保守主義についての見解など、日本の社会科学の通説とは異質の議論がなされており、その当否の検討が必要であると考えられる。

それにしても、近代社会への参入が後発的であった日本では、社会科学の領域においてマルクス主義がもつ影響力が、極めて大きかった。そのためにマルクス主義の残滓が今でも色濃く残存している。そのために、マルクス主義の批判的研究も、未だに十分には遂行されていない。本稿が目指したマルクス主義のトータルな批判的総括の試みが、マルクス主義およびその周辺からほとんど出てきていないのは、驚きであった。したがって、日本におけるマルクス主義の生成・発展・変容の過程を知識社会学的手法で研究することも、もう一つの

研究課題として浮上しているのではなからうか？²³⁾

- 1) 中川八洋『正統の哲学・異端の思想』（徳間書店）5 頁
- 2) 同 42-3 頁
- 3) 中西輝政『日本文明の興廃：いま岐路に立つ，この国』PHP 研究所，2006：298 頁
- 4) 中川八洋『正統の哲学・異端の思想』（徳間書店）15 頁
- 5) 同 19 頁
- 6) 同 42-3 頁
- 7) 八木紀一郎『ウィーンの経済思想：メンガー兄弟から 20 世紀へ』ミネルヴァ書房（2004）162 頁
- 8) 同 180 頁
- 9) 中川八洋『正統の哲学・異端の思想』（徳間書店）42-3 頁
- 10) 同 18 頁
- 11) Robinson, Dave & Zarate, “Introducing Rousseau”, Icon Books, 2001；渡部昇一監訳『絵解き・ルソーの哲学：社会を毒する呪詛の思想』PHP 研究所，2002：191 頁
- 12) 同 192 頁
- 13) 同 192 頁
- 14) 同 192 頁
- 15) 同 192-3 頁
- 16) 同 193 頁
- 17) 同 200 頁
- 18) 同 201 頁
- 19) 中川八洋『正統の哲学・異端の思想』（徳間書店）350 頁
- 20) 同 74 頁
- 21) 同 197 頁
- 22) 同 258 頁
- 23) それに関連するような試みに，水谷三公氏の『ラスキとその仲間：「赤い 30 年代」の知識人』中公叢書（1994）や『丸山真男：ある時代の肖像』ちくま新書（2004）がある。

（本稿は，平成 20（2008）年度松山大学特別助成制度による研究成果の一部である）